



9月23日の房総沖地震(M6.7)の続報

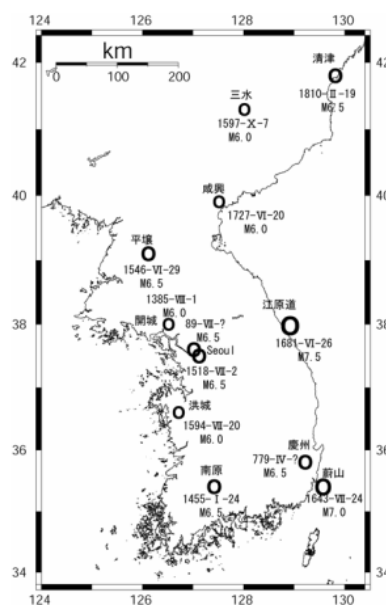
前回のニュースレターで、熊本地震のようにこのM6.7の地震が前震である可能性を示唆しました。その後、データが9月30日まで使用できるようになったので解析を行いました。結論として、地震発生当初よりは、さらに大きな地震が発生する可能性が低くなっている事がわかりましたが、従来この地域で発生していた地震活動とはまだ性質が異なっており、まだ「安全宣言」を出す事はできません。

また房総沖では、この沖合で発生したM6.7の地震とは別に海岸のすぐそばでM6クラスの地震が発生する可能性がまだ残っています。

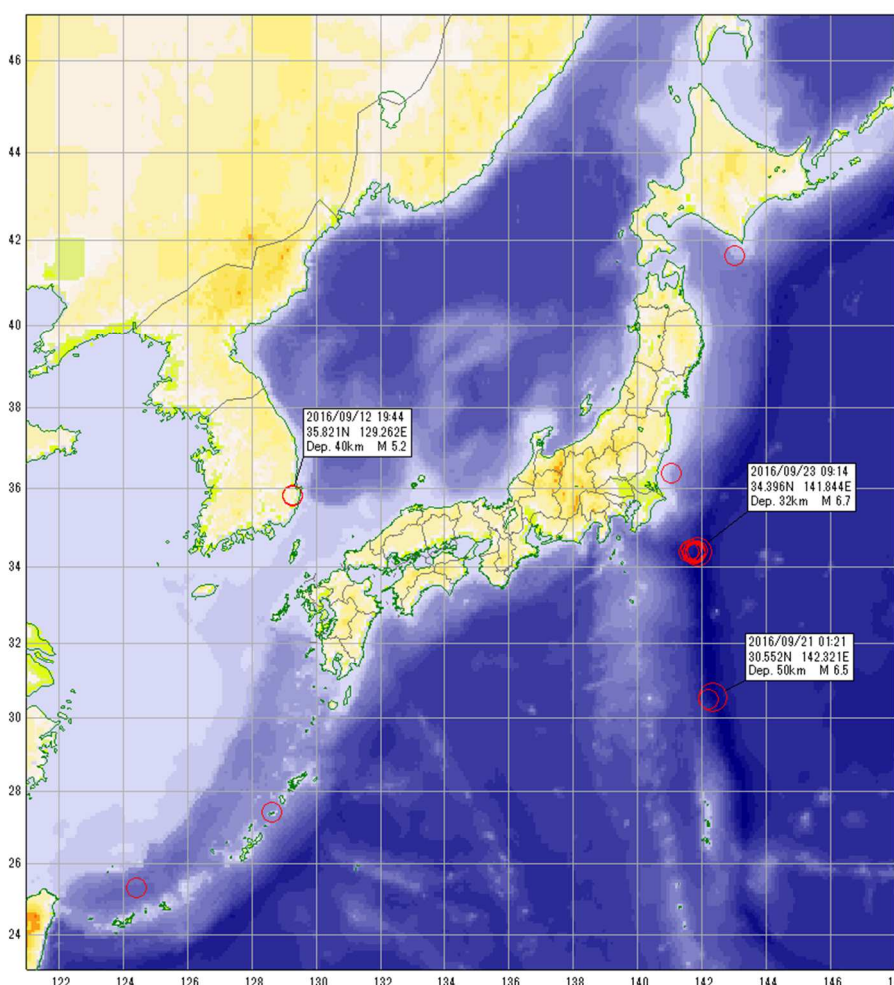
まとめますと房総沖では1) 沖合でのM7クラス以上の地震発生、2) 半島のすぐそばでのM6クラスの地震発生、の2つの可能性が考えられます。

2016年9月の地震活動概観

9月はこれまでに無い地震活動が記録されました。一つは朝鮮半島東側でマグニチュード5を超える複数の地震活動が観測されました。地震発生のメカニズムとしては熊本地震と同様と考えられており、基本的にはフィリピン海プレートが西日本を押ししている事が原因の地震です。南海トラフの巨大地震へのステップが確実に上昇している証拠とも考えられます。右下の図は9月のマグニチュード(M)5以上の地震です。今月は全部で17個発生しました(先月は13個)。やはり房総沖での活動が目立ちます。



上の図は朝鮮半島の歴史地震の記録で、東海岸ではマグニチュード7.5ないし7の地震が16-17世紀に発生している事を忘れてはいけません(秋ほか、2005, 歴史地震)。

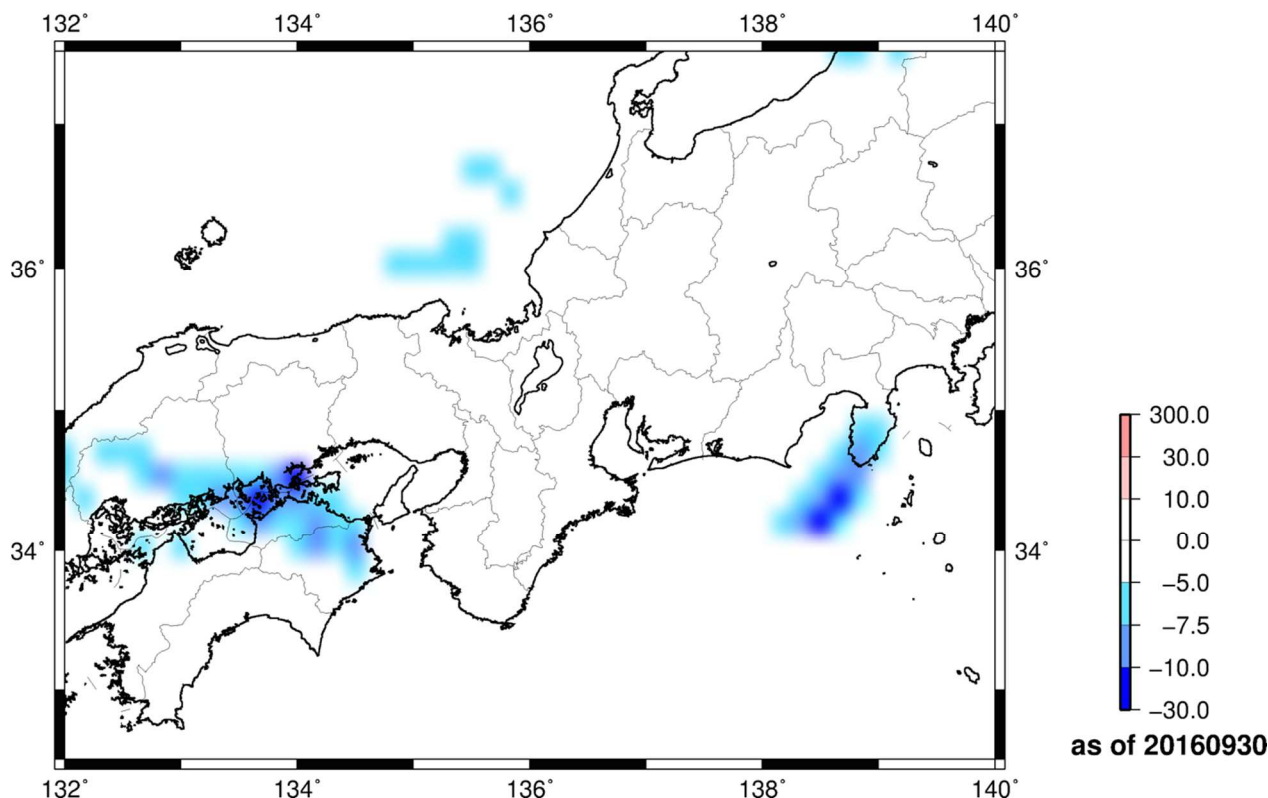
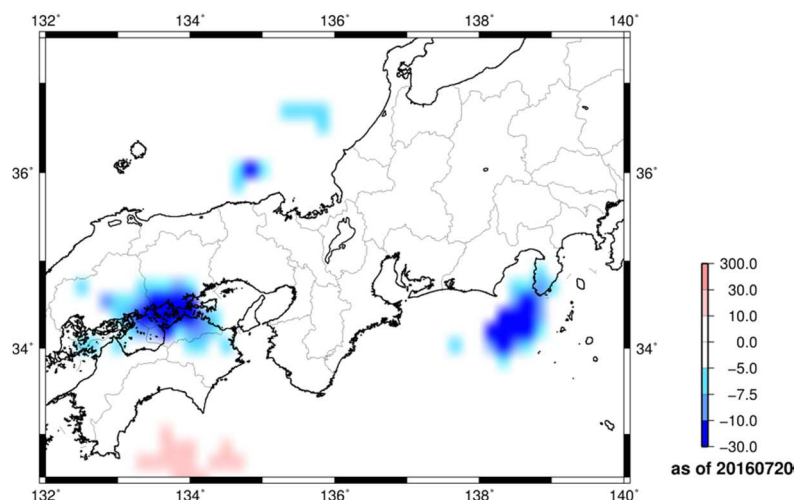




東海地方より西側の陸域にターゲットを絞った地下天気図®

関東地方および東北地方は2011年の東日本大震災の発生前と後で、地震発生のパターンが大きく変化してしまいました。それに対し、東海地方より西側の領域では、より長期間のデータを使った解析が可能です。今回紹介する地下天気図®は2001年からの15年以上の地震活動を用いて解析したものです。

今年の7月20日の段階(右側の図)では、中国・四国地方と伊豆半島南西に比較的顕著な地震活動の静穏化領域(図中の青い部分)が広がっていました。9月30日の時点でもその状況はあまり変化していない事がわかりました。その広がり(面積)から推測されるマグニチュードは現時点ではいずれも7を超える可能性は低いと考えています。また発生時期はまだ異常が続いていますので、すぐに発生する可能性は極めて低いと考えられます。



京都大学が大地震直前の電離層異常を検出したとの記者会見がありました

東日本大震災前に北海道大学の日置教授のグループが地震発生40分ほど前から電離層の異常を発見し、その後マグニチュード8.5以上の巨大地震8例を解析し、その全てで同様の異常が存在していた事を報告していますが、このように独立のグループが同様の結果を得た事は地震予知研究の進展にとって極めて望ましい事と考えています。

<http://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20160930-00000017-kyt-sctch>

<http://www3.nhk.or.jp/news/html/20161001/k10010713691000.html>